

前の数学の続きです。

初めての授業の時の皆さんの感想シートを読み返していると中にこういうのがありました。

「プリントはいつまでにしたらいいですか。」

ごめんなさい。お答えしてないままでしたね。あの頃は「できるときにしたらいいよ」でした。あえて宿題にはしませんでしたね。その理由を改めて今言います。それは、

「しんどさが先に来てはいけない」という気持ちがあったからです。「まず、授業に楽しいという思いを持ってほしい。」これが私の願いでした。そして、一旦《興味・関心・意欲》が動き出したら、そのときには宿題をやらされてやっているときよりもはるかに大きな力が働き始めるのです。

そのような力が少しでも働く種をまいてから徐々に宿題を出していけばよい、それが私の考えでした。

さて、前回に続き今回も、忘れられない出会いを皆さんにお話したいと思います。

それは今年の3月下旬。私が突発性難聴を発病して入院していた時のことです。その病棟の看護師に、私の教え子が二人いました。

一人はTさん。もう15年以上前の教え子でした。入院してから私はステロイド剤の点滴を毎日受け、その副作用からか異常発汗と体温調節異常に悩まされていました。なかなか眠れず、深夜トイレに行った時のことです。部屋に帰ってきてドアをあけようとしてみると、「せんせー」という声が背中に聞こえました。ドクターのことを呼んでいるんだろうと思いました。ドアを開けながら右を見ると、Tさんが「先生ー」と呼んでくれているのでした。深夜の病室の巡回中のようなのでした。そして、Tさんは、「先生、おやすみ」とにっこり。その瞬間、何かとても暖かいものが私の中に流れ込んできて、私も「おやすみ。」 体は苦しかったけれど、その夜、心は穏やかでした。

もう一人は、Kさんです。実は病棟はちがうのだけれど、わざわざ私の部屋へ来てくれて、「先生、私Kです。」「おおー！Kさん。」そのとき、Kさんは「先生の授業分かりやすかった。センター試験で、数学99点だったんよ。先生のおかげじゃ。」と言ってくれました。忙しい中で、わざわざそのことを伝えに来てくれたのです。私は不思議な気持ちになりました。数学は中学校で教えたただけなのに、「先生のおかげでセンター試験がよくできた」と言ってくれる。

それまでの苦しい闘病生活で、私の内に断片的に固まってきていた《授業のイメージ》が、この二人との出会いを通して、全体として一つにまとまっていったように思います。

退院するとき、ナースステーションへお礼のあいさつに行ったとき、左の方にTさんがいました。看護師さん方にお礼を伝えた後、「Tさん、ちょっと」とTさん呼びました。

どうしても伝えておきたいことがあったのです。

それは、あの夜のことでした。あの夜のことについて、私は心の底からお礼を言いたかったのです。

そこには、こういう思いもありました。「今伝えておかなければ、もう伝える機会はないかもしれない…。」

あの夜のことの感謝を伝えた後、私はTさんに言いました。「Tさん。中学校以来15年ぶりなんよねえ。」「先生、歳バレるやん。」「あ、ゴメンゴメン。じゃけどね、今回ワシ、こういうことで入院したけん会えたんよねえ。なんか、奇跡的やなあ。ということは、ワシがこれから元気だったら、また15年位は会わんわけやん。」

もしかしたら、もうずっと会うことはないかもしれない…。

そう考えると、ほんとうに神様が与えてくださった奇跡的な出会いだったような気がするのです。